

# 土木学会四国支部「土木紀行」No.61

## 徳島阿波おどり空港

徳島阿波おどり空港ターミナルは、2000m だった滑走路が 2500m に延伸されるのに伴って、海側に移転し、2010 年 4 月 8 日にオープンした。

設計にあたっては、2009 年度に「徳島飛行場新ターミナル地域景観計画検討委員会」が開かれ、徳島の玄関口としての空港のありかたについて検討された。検討委員会では、地域らしさと飛行機に乗るというワクワク感を演出できる景観を目指すことが話し合われた。ただ、空港という場所は、さまざまな関係者で成り立っている。そのため、空港の空間全体のマスタープランをたてることが非常に難しい場所でもある。

たとえば、空港ターミナルの敷地などについては国土交通省の担当であるが、ターミナルビルについては徳島空港ビル株式会社が設計を担当する。また、駐車場については、その位置を国土交通省で定めたあとは、敷地内の使い方は駐車場の管理運営を行う会社にゆだねられる。

徳島阿波おどり空港の設計にあたっては、「徳島飛行場新ターミナル地域景観計画検討委員会」とターミナルビル、駐車場が協力し合い、コンセプトを実現することができた。ただ、オープン当時から変更された部分も多く、現状では必ずしも良い空間とはいえないところもある。

今回の土木紀行では、徳島阿波おどり空港ターミナルで行った工夫や現状の問題点などを紹介したい。

まず、全体の敷地計画としては、徳島の玄関口として、地域らしさが演出できるようにしてある。それはつまり、降り立った時に見える海への眺望である。「徳島飛行場新ターミナル地域景観計画検討委員会」では、敷地の中央に芝生の緑地を広くとり、海への眺望を確保するよう考案した。天気の良い日には、大鳴門橋も見える。駐車場運営会社もこのコンセプトに協力し、景観検討委員会の提言通り、中央を緑地になるように整備した。また、駐車場の発券機も、この軸線上には来ないように配置してある。

空港の外に目をやると、通常、空港周囲には、ホテ



写真1 阿波おどり空港ターミナルビル



写真2 中央部の緑地

ルや土産物、観光名所などの大きな屋外広告物が立ち並ぶことが多いが、これも徳島県の屋外広告物条例によって制限がかかっており、いまのところそのような広告物は現れていない。また、景観検討委員会では、海側に隣接する県有の工業用地の敷地割りについても、これと連動して軸線を確保するように提言している。

さらに、空港に降り立ったときの印象を向上させるために、駐車場の敷地には、隠れた工夫が施されている。地方空港の駐車場では、ターミナルビルの全面に駐車場が広がり、一番最初に目に入るのが「車の海」になることが多い。阿波おどり空港ではそれを避けるために、ターミナルビルと駐車場の間に緩やかな芝生の土手をつくっている。ただ、委員会案では現在よりもっとすっきりした眺めが得られるはずであった。委員会案では、ビル側に身障者用の駐車場を持ってくようになっていたことと、駐車場管理者の事務所が現在のような緑地軸のすぐ脇にあの大きさに建つことは想定されていなかった。また、供用開始後に、ターミナルビルと駐車場の間に、横断防止や路上駐車防止などの柵やフェンス、ポールが多く立てられ、かなり煩雑な印象になったのは残念である。

ターミナルビルに目を向けてみよう。ターミナルビルの最大の特徴は、外部の緑地軸が、ビル内にも抜けていることである。ビルの中央部は、開放的な空間になっており、駐機場に向かう線上に一切の壁が無いために、ビルに入った瞬間に駐機している飛行機が見えるのである。保安検査場を通過して制限区域に入った後でないと飛行機を見ることができない空港がほとんどだが、阿波おどり空港では、空港に着いた瞬間にこれから乗る飛行機が見えるため、旅の楽しさをより増幅させるような仕掛けになっている。当然、見送りに来た人も迎えに来た人も飛行機の姿を見ることができる。

ただ、これも残念なことは、ターミナルビルに入って、その方向を保ったまま保安検査場のある2階へ向かうエスカレーターに乗ることができ、2階へ上がれば、より近くなった機体を見ることができるような作りになっているのだが、いつの間にか、エスカレーターの突き当たり大きな看板が作られてしまったのである。たしかに、多くの人の目に触れるところであり、広告効果は高いと思われる。だが、多くの人の視線が集まるところは、営利目的では無く、空港や旅を楽しむために利用されるべきであろう。今後の改善に期待したい。



写真3 ビルに入った瞬間に見える飛行機



写真4 エスカレーター突き当たりの看板